

い投書がたくさん最後まで続いて来たのですが、こういうことはそれまで一度もなかったとのことでした。それらの手紙の中には「六十歳の老生も大いに研究の念を起こした」とか、「一家涙を流して聞いていゝ」とか、また「放送局の馬鹿！中根さんに三十分でやめさせて！・・・」などというのもあったのです。私の放送時間は午後の六時から六時三十分でしたが、放送局の都合で六時四十分まで四十分間やってよい日があつたのです。それでときどき四十分間放送を続けることがあつたのですが、聴取者にはそういう事情がわからないため、四十分やるものだと思われ、三十分間でやめると三十分でやめさせたということになり、「放送局の馬鹿！三十分でやめさせて！」などといった投書などが来たわけでした。このときに来た手紙は放送局からもらつて大切に保存していますが、普通の文字で書いたものや、速記法を使って書いたものなどみな感動深いものばかりです。

この講座が始まる五日ほど前に特別に講演したときでした。放送室を出ると電話がかかっているといふのです。それはどこからかかつて来たのかといへば、思いがけない高利貸し屋さんからでした。そのころ京都の両洋中学を経営していたので

